青梅市文化財ニュース

第３０９号

平成２５年７月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

在来種と外来種、日本鳥類目録

青梅から奥多摩の丘陵や山間部の山道を歩くと、あちこちでガビチョウという鳥が大きな声で鳴いています。今は珍しくもない鳥ですが、元々日本にいた鳥（在来種）ではなく、飼鳥として日本に移入された個体が野生化した鳥（外来種）です。ガビチョウの場合、多摩地域では 1990 年代前半より個体数が増えてきました。こうした外来種としての鳥は、他にソウシチョウ、カワラバト（ドバト）、ベニスズメなどが知られ、身近なコジュケイも外来種です。自然観察会、マスコミの記事、自然保護行政など多くの場で、在来種と外来種は区別されています。では、何を根拠に区別しているのか気になります。

鳥類学の専門家やアマチュアで構成する日本鳥学会という団体（学会）があります。1912（明治 45）年の発足で、主に日本の鳥類に関する専門的な研究・調査などを進めています。鳥学会は「日本鳥類目録」という資料も発行しています。これは、日本で確認された鳥類の分類や種類、分布などをまとめた記録集ですが、この中で在来種、外来種が区別され、それが区別の公式な基準になります。この区別は、その種の生息状況などから専門家（達）が判断したもので、鳥自体に由来するものではありません。日本鳥類目録は写真もイラストもない、無味乾燥なデータ集ですが、日本の鳥類に関する調査研究、出版、行政などの基本的な資料になります。

鳥類目録の初版は 1922（大正 11）年の発行で、最新の改訂第７版が 2012 年９月に発行されました。第６版から 12 年ぶりの発行で、内容が大きく改訂され関係者の間で話題になりました。例えば、記載された種類数が第６版では 18 目 74 科 542 種（外来種を含め 19 目 76 科 568 種）でしたが、第７版では 24 目 81 科 633 種（同：25 目 86 科 676 種）と大きく増加しました。また、分類も見直され、青梅市の鳥でもあるウグイスが含まれていたウグイス科は、キクイタダキ科、ウグイス科、ムシクイ科、ズグロムシクイ科、センニュウ科、ヨシキリ科、セッカ科の７科に細分されています。これは、ＤＮＡなど

を用いた分類学の進歩や記録の再検討、デジカメなどの記録機器が普及したことなどの結果だそうです。日本の鳥の分類や種名は、最新の鳥類目録の内容が基準となります。今後、調査・研究の記録整理、論文作成、図鑑の発行、自然保護行政に至る様々な分野で、第６版基準からの切り替えが必要になりそうです。

あまり馴染みのない日本鳥類目録も、見方を変えるといろいろなことが読み取れます。辞書を読むような楽しみ方といえるかもしれません。鳥類目録の内容は、インターネットでも公開されています。因みに、第７版でもガビチョウやソウシチョウ、コジュケイは外来種のままでした。定着しているように見えても、在来種へのハードルは高そうです。

（文責　櫻岡　幸治）